

令和3年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和3年度紀南地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】 令和3年度第1回
紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要・・・・・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】 令和2年度協議会での主な意見・・・・・・・・・・・・ P 4
- 【資料3】 紀南地域の生徒の木本・紀南両校への通学状況について・・・・ P 7
- 【参考資料1】 東紀州地域中学校 卒業生数の推移と予測（含社会増減）・・ P 12
- 【参考資料2】 熊野市・南牟婁郡中学校卒業生（予測）と
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・・・・・ P 13
- 【参考資料3】 今後の県立高校活性化の基本となる考え方について・・・・ P 14
- 【参考資料4】 紀南高等学校活性化取組の総括的な検証「協議のまとめ」
について・・・・・・・・・・・・ P 16

令和3年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

※第2回より

No		所属及び名前	
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔	継続
2	地域有識者	熊野商工会議所青年部 幹事 森本 健一	継続
3		文恵丸水産 代表 長山 行文	継続
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児	継続
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也	継続
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一	新
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章	継続
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 高垣 裕人 (中学校代表)	継続
9		紀南PTA連合会 進路研究副委員長 森澤 和俊 (小学校代表)	新
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太	新
11		県立紀南高等学校PTA 会長 水谷 徹	継続
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄	新
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也	継続
14	小中学校長代表	御浜町立神志山小学校 校長 濱田 充宏	新
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治	新
16	小中学校教員代表	熊野市立有馬小学校 教諭 久保 範頭	新
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久	継続
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一	継続
19		県立紀南高等学校 校長 森 典英	継続
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖	継続

令和 3 年度第 1 回紀南地域高等学校活性化推進協議会（8 / 20）の概要

- 1 日時 令和 3 年 8 月 20 日（金）19 時 00 分から 21 時 00 分まで
- 2 場所 オンライン実施（事務局：吉田山会館 206 号室）
- 3 概要

次期「県立高等学校活性化計画」の策定に向けた動きや紀南高校の活性化取組の総括的な検証、木本高校の取組等を共有し、今後の中学校卒業生数の減少や当地域を取り巻く高校の現状や課題をふまえ、これからの紀南地域の子どもたちの学びや県立高校のあり方について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

《紀南地域の高校のあり方について》

- 紀南 P T A 連合会では、当地域の過疎化を防ぐには地域の産業構造の改革に取り組む必要があると考えており、そのためには、ICT 教育の充実や、地元での安定した就業の確保、大学進学者が帰郷を望むような地域の活性化に取り組む必要がある。なお、今年度は、保護者約 2000 人を対象に、紀南地域の高等学校のあり方等についてアンケートを実施する予定である。
- 紀南高校は、時代のニーズをふまえ地域に根差した取組を進めているが、地域の中学生や保護者は伝統校の木本高校を目指す傾向がどうしても強い。木本高校の令和 2 年度の四年制大学への進学実績は 65 人で、大学進学のニーズとしては 2 学級規模に相当する人数となっている。進路を検討するにあたって、木本高校の普通科に対する進学校のイメージと多様な進学実績等の現状にギャップを感じる中学生や保護者もいる。
- 小規模になることで、これまでの地域に根差した学習活動や部活動を行うことがさらに難しくなることが予想される。
- 木本高校は、大学への進学希望を実現できる地域の高校として、普通科 3 学級・総合学科 1 学級で教育活動に取り組んでいるが、学級減に伴う教員減により、教育活動をこれまでと同様に行うことが難しくなっている。今後、部活動の顧問が確保できないだけでなく、科目数の多い地理歴史・公民科や理科の教員の配置が難しくなり、その結果、生徒の選択の幅が狭くなっていく。
- 約 50 名の地域外への流出に歯止めがかかれば、2 校存続も考えられるのではないかと。コロナ禍の影響で地域に魅力を感じ、地方の学校を積極的に目指す傾向が強まることも考えられる。紀南高校の県外生徒を受け入れる定員を拡げてはどうか。

⇒（事務局）現在の入学者選抜では、県内すべての小規模校で定員の5%を上限に県外生徒を受け入れる制度を実施しているが、実際には一部の学校を除いて入学者はほとんどいないのが現状である。加えて希望者を募るにあたっては、学びの充実や受け入れのための環境整備と併せて考える必要がある。

- 紀南高校は、コミュニティスクールとして教職員も一生懸命に取り組んでいる。教職員の話から、多様な学力の生徒や、特別な支援を必要とする生徒も在籍している中、教員数が減少し学校も無理していることがうかがえる。同窓会としても、ほとんどの者が何が何でも学校を存続させてほしいとは思っていない。2校存続させることによりできるだけ幅広く学力保障、進路実現ができる体制を目指してきたが、仮に紀南高校が1学級になったときに、子どもたちにとって本当にそれでいいのか真剣に考えている。一方、もし木本高校に統合された場合には、紀宝町の子どもたちは通学に困ることになり、子どもたちのために地域としてどうすればいいのか悩ましい。ただ、紀南高校が地域からなくなると、紀宝町の中学校卒業者が、和歌山県に流れてしまうのは間違いない。
- 子どものことを第一に考えると、統合が必要だと考える。地元の者が話すとどうしても木本高校寄り・紀南高校寄りの考えになってしまうので、県主導で統合の方向性を出したうえで、その後ハード面、ソフト面をどうするか考えるべきではないか。地域全体の中学校卒業生数が、3、4学級規模になる前に先に統合をすべきだと思う。

令和2年度協議会での主な意見

＜両校の活性化にかかる取組の成果と課題について＞

- 木本高校では七里御浜等の地域の清掃活動などの奉仕作業を通して、この地域の良さを再認識することにつながり、生徒たちが生まれ育った場所を大切にしたいという思いが高まっている。また、高校生が小学校に英語を教えに行く取組により、生徒自身の英語の理解もさらに深まり、学習意欲の高まりにもつながっている。
- 木本高校生による小学校での英語の授業は、今年度はコロナ禍のため実施出来なかったが、昨年度は2回実施し、とても良い活動であった。小学生は教えてもらうことで高校生にあこがれ、また顔つきが変わった小学生の変化を目の当たりにした高校生も自信を持つことにつながっている。
- 紀南高校では、インターンシップの体験を通じて学んだ大切なことを小・中学生に伝える等の活動などを、地域の新聞社やケーブルテレビ等に積極的に情報提供している。

＜当地域の高校における教育内容について＞

- この地域の高校生はいろいろな職業に接することが少ない。職業が多様であるという情報が得られるような教育活動が推進されることが望ましい。
- この地域で働く場所が少ないというイメージがあるからか、求人を出してもなかなか来てもらえない。高卒生の就職者が欲しいし、地域でできる限り働いてもらいたい。紀南高校では様々な分野の地元の職業人が、講師として説明する機会があるので、その中でもっとPRをしていきたい。
- 地域に生徒を定着させるには、産学が連携して、今までと違った観点で子どもたちを育てていくべきである。国がGIGAスクール構想を進めているが、通信環境が整っていない家庭も多い。情報ネットワークを整え、ICTの使い方を学ぶことで2校がうまく連携することができれば、小規模となったとしても2校のまま存続していける可能性はある。
- 木本高校が進学校として存続していくためには、5クラス規模でないと教員の確保等の面で課題が生じると聞いていたが、4学級規模となった現高校1年生の様子はどうか。
 - 理科などは科目ごとの専門分野の教員を確保することが難しいが、スタディサプリやクラッシーなどを活用したり、教員が個別で質問を受けつけたりすることにより対応している。

＜部活動について＞

- 生徒の減少による学級減の結果、教員が減り、部活動を指導する顧問が不足し、希望する生徒がいても廃部せざるを得なくなっている。子どもたちの学校生活を充実するうえで部活動は大きなウエイトを占めている。部活動が学校と地域をつなげる大切な架け橋となるよう、教育委員会が必要に応じて外部指導者を確保して欲しい。
 - 部活動は、異なる学年の子どもたちが一緒に活動することにより主体的に非認知能力を培える場であり、コロナ禍の中で、その教育的効果が一層浮き彫りになっ

たと思う。一方、働き方改革を進める中で、教職員の時間外勤務に占める割合の最上位は、部活動に係わる時間であることが分かっている。また、部活動を理由に地域外へ進学している生徒は毎年20人～30人と地域外進学者の約半数近くに及ぶ。現在、外部人材の活用や地域スポーツの活用等の方向性を国が出そうとしており、それを参考にして検討していきたい。

- 紀南高校はコミュニティスクールであるが、地域による部活動のサポートもあるのか。
 - 教育課程の中でのサポートが中心であるが、外部指導員として運動部の監督をしていただいたり、同窓会や地域企業の方からは、陸上競技部のためにオールウェザートラックを設置していただいたりもしている。
- それぞれの学校において生徒減にともない存続が難しくなってきた部活動もある中、自身が種目やレベルを求めて管外へ進学する生徒も多い。両校で一体となって部活動を行ってはどうか。
 - 合同での出場が認められている競技や参加できる大会はある。また、校舎制の南伊勢高校では、両校舎で移動しあって合同練習をしている部も存在する。もし、当地域において同様な活動を行おうとすると、移動時間がかかるため練習時間が短縮されることが予測されるが、対応策として検討に値するのではないか。

《県立高校の現状等について》

- 令和3年度の入試において、尾鷲高校で1クラス35人を導入したことについて、県としての考え方や今後の方針について説明が欲しい。
 - すでに統合した学校のある地域において、さらに1学級を40人として学級減を行うと当該地域の専門学科の学びが維持出来なくなることから、定員を30人、35人とした。高校標準法により、1学級40人を標準としており、白山高校と尾鷲高校を合わせて40人を減じた。こうすることで専門学科の学びは維持されるが、入学定員そのものは減り、教職員の数も減ることにもともない、少ない教職員で以前と変わらない学級数に対応する授業を担わなくてはならなくなっている。
- 後期選抜において、志願倍率が0.1倍を切っている学校の状況について説明して欲しい。
 - 現在の「県立高等学校活性化計画」（以下、「計画」という。）においては、小規模校の活性化に取り組み、地域と一体になった学びを推進するとともに、県内だけでなく県外からも入学できる入試制度を導入するなど、活性化に取り組んでいるものの、地元の中学生在が入学する割合は高まっていないのが現状である。

＜地域の高校のあり方を協議する場合に大切な考え方について＞

- 統合について協議する際には、法的、財政的な制約があると思うが、子どものことを一番に考えて議論してほしい。誰一人取り残さない教育を目指し、どの地域に生まれても子どもたちの学びを保障してほしい。
- 子どもたちが自分の行きたいところで学べるようにしてほしい。また、保護者の意見も聞いて欲しい。
- 令和7年度の生徒減について協議しなければならないのも分かるが、御浜町や熊野市の昨年の出生数は驚くほど少ない。15年先の少子化をふまえて学校のあり方を考

えることによって、令和7年度のあり方の考え方も変わるのではないかと。和歌山県と三重県との生徒の行き来も考慮するとともに、人口規模を保つための方策についてもあわせて検討すべきである。

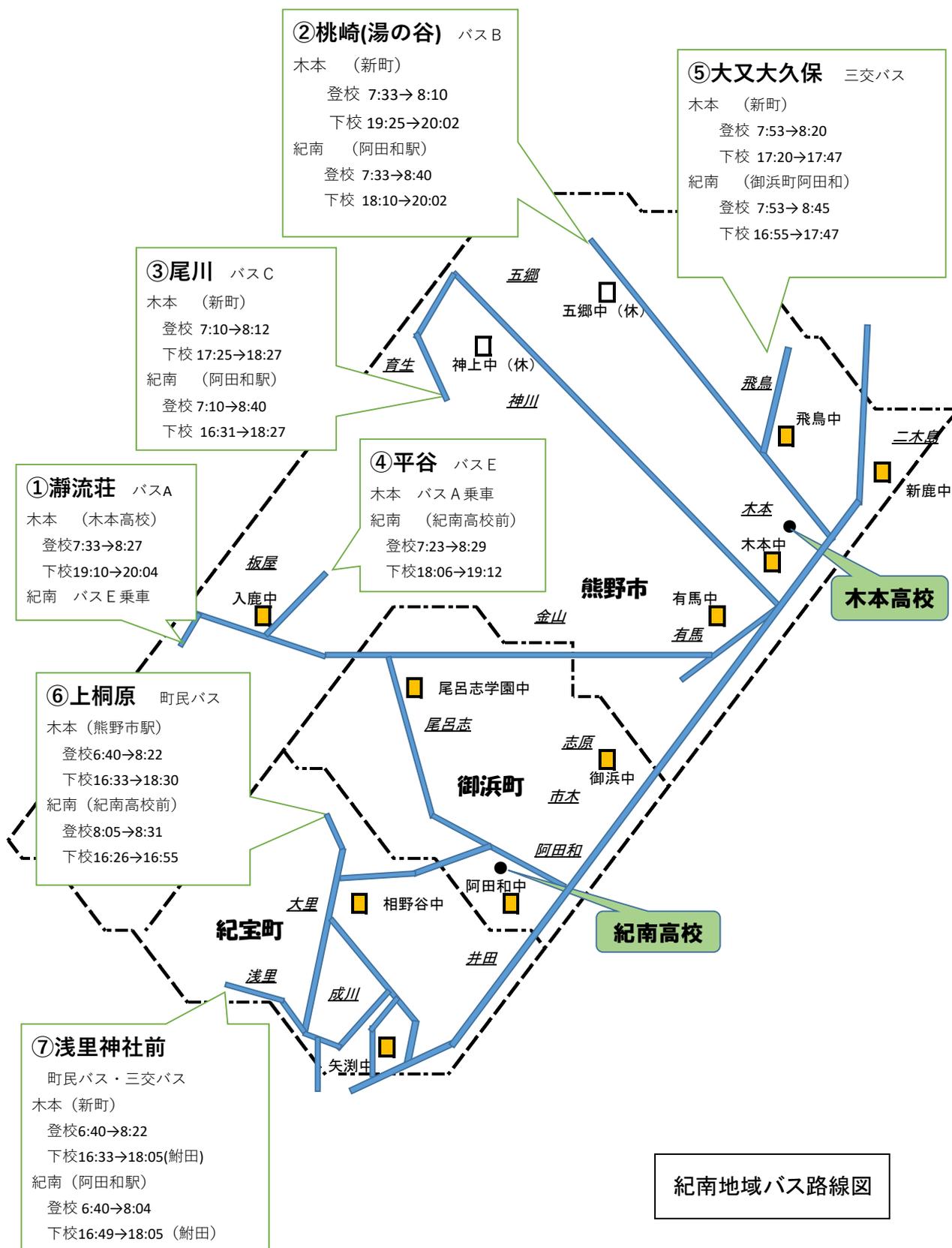
- 次年度の活性化協議会については、平成28年度のように途中でゴールを見失うことのないよう、論点を焦点化して県の方向性を示し、子どもたちの学びがどうあるべきか協議して欲しい。また、この協議会での意見を教育改革推進会議にも届けてもらいたい。
 - 地域協議会でいただいたご意見は、教育警察常任委員会に報告するとともに、総合教育会議や教育改革推進会議にも報告している。特に次年度の教育改革推進会議は次期計画の策定に向けた審議が中心となることから、しっかりフィードバックしていく。次期計画期間は令和4年度からの5年間と考えており、今回議論していただいた令和7年度の当地域の高校のあり方については、この期間中のこととなるので、引き続きご意見をいただきたい。
- 紀南PTA連合会では、木本・紀南両高校の統合に関するアンケートを、約150人の保護者に応えてもらったところ、両校の存続に関して多様な意見を持っていることが分かった。引き続き調査を行っていききたい。

<紀南地域の県立高校のあり方について>

- 中学校卒業生数の減にとともに、紀南地域全体で5学級の規模が見込まれる令和7年度がひとつの区切りであると思うが、現在和歌山県が取り組んでいるように、三重県でも具体的な再編を考えているのか。
 - 現計画においては、地方創生の流れもふまえて、小規模校であっても、地域と一体になって学んでいくことを柱としてやってきた。しかし、計画期間が残り1年となり、地域と一体となった学びをスタートさせた4年前とはフェーズが変わってきているという認識は持っている。次期計画の策定においては、地域協議会の意見や、県立高等学校みらいのあり方検討委員会での意見等を勘案して、再編に対する方向性は打ち出していかななくてはならないと感じているが、今の段階では具体的には決まっていない。
- 2校を存続しても、両校でそれぞれ生徒数が減っていけば、校内での選択肢が減ってしまうことから、現在2割程度いる管外進学者がさらに増えてしまう可能性がある。両校のよいところを残して、校内の選択肢を増やすために統合することは有りうるのではないかと。この地域から管外へ進学することは、通学費等、経済的な負担が大きい。学校の新たな魅力を高め、この地域の学びを充実させるという点で、統合は必要である。
- 熊野市から遠方に位置する紀宝町にとっては、かつての中間地点に新校を設立する案には賛成したが、熊野市まで通学することは単純には受け入れがたい。仮に統合により一時的に5学級を維持したとしても、すぐに4学級、3学級となってしまう。紀南高校は小さな学校であるが、きちんと学べる環境があり、先生方は一生懸命取り組んでもらっている。さらなる魅力を打ち出して、存続を図ることも検討して欲しい。
- 紀宝町内では、今後、学校へ入学してくる子どもたちは増々減っていく。県から具体的な案の提示をしてもらい、他府県等の好事例を参考にし、住民の声もしっかりと聞きながら、今後の長期的な学校のあり方を協議していくべきである。

紀南地域の生徒の木本・紀南両校への通学状況について

資料3



1 地元中学校の進学状況

直近5年（平成28年度～令和2年度）の中学校別卒業生徒数・進学生徒数の累計人数

中学校	卒業生徒	木本高校	紀南高校	新宮市内の高校	その他
新鹿	28	17 (60.7%)	5 (17.9%)	0	6 (21.4%)
木本	234	148 (63.2%)	35 (15.0%)	11 (4.7%)	40 (17.1%)
有馬	293	176 (60.0%)	53 (18.1%)	15 (5.1%)	49 (16.7%)
飛鳥	39	20 (51.3%)	2 (5.1%)	0	17 (43.6%)
入鹿	26	14 (53.8%)	10 (38.4%)	0	2 (7.7%)
御浜	253	150 (59.3%)	51 (20.2%)	19 (7.5%)	33 (13.0%)
阿田和	117	70 (59.8%)	28 (23.9%)	9 (7.8%)	10 (8.5%)
尾呂志学園	22	11 (50.0%)	6 (27.2%)	0	5 (22.7%)
相野谷	44	4 (9.0%)	25 (56.8%)	14 (31.8%)	1 (2.3%)
矢渕	430	200 (46.5%)	125 (29.0%)	47 (10.9%)	58 (13.5%)
合計	1486	810 (54.5%)	340 (22.9%)	115 (7.7%)	221 (14.9%)

単位：人・（％）

<参考>：覚書により志願できる和歌山県立高等学校

志願できる居住地など	志願できる高等学校
<ul style="list-style-type: none"> ・相野谷中学校に在籍する者 ・旧矢渕中学校浅里分校区に在住する者 ・旧上川中学校区で熊野川中学校に教育委託生として在籍する者 	和歌山県立新宮高等学校 和歌山県立新翔高等学校

※相野谷中学校から新宮市内の高校への進学者14人全員が県立高校2校へ進学

2 高校への通学方法

紀宝町浅里地区

路線⑦紀宝町民バス浅里・鶴方線を利用する浅里地区は、最終便が早く、紀南、木本両校からの下校時には、JR新宮駅経由で鮎田バス停（18:05着）までとなる（鮎田－浅里神社間約10km）。なお、現在、同地区から木本高校に通学している生徒1名は、新宮駅への自家用車送迎で通学している。また、現在同地区には中学生はいないが小学生が2名いる。

熊野市平谷地区

路線④の熊野市バスE線を利用する平谷地区は、木本高校へ通学する生徒は、往復とも入鹿中学校前で乗り換える（往路④→①、復路①→④）必要があるが、復路においては、路線④の最終便が早いことから、木本高校を16:30に下校する必要がある（④への乗換に84分かかる）。現在、同地区に在住する中学生はいないが小学校に2名いる。

熊野市尾川地区

路線③の熊野市バスCは、最終便が新町17:15発と早く、紀南高校からはJR利用で16:10分頃の下校に、木本高校は17:15頃に下校する必要がある。

紀宝町桐原地区

路線⑥の紀宝町民バス相野谷線を利用する上桐原地区には、最終便が早いため、木本高校の生徒は16:18頃に下校、紀南高校の生徒も16:26発のバスに乗る必要がある。

<参考>：両校の始業・終業時刻

【木本高校】 始業 8:45～終業 15:30(7限 ～16:15) 【紀南高校】 始業 9:05～終業 16:05

○ 主な路線別通学方法（路線①～⑦）

以下の資料は ・所要時間は乗車時間に加えて徒歩や乗換での待ち時間を含んだもの。
 ・下校時刻は、下校するのに最も遅い便。

路線①	区間（始発地-終着地）	通学費(1 カ月定期)	利用する中学校区
熊野市バスA 熊野古道瀬流荘線	瀬流荘—木本高校	15,000 円	入鹿中学校区 有馬中学校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 54 分・所要時間 54 分 〈下校時〉乗車時間 54 分・所要時間 54 分

登校時 瀬流荘 → 入鹿中学校前 → 木本高校
 7:33 7:41 8:27
下校時 木本高校前 → 入鹿中学校前 → 瀬流荘
 19:10 19:56 20:04

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 48 分・所要時間 48 分 〈下校時〉乗車時間 66 分・所要時間 66 分

登校時 平谷 → 瀬流荘 → 入鹿中学校前 → 紀南高校前
 7:23 7:47 7:55 8:29
下校時 紀南高校前 → 入鹿中学校前 → 瀬流荘 → 平谷
 18:06 18:40 18:48 19:12

路線②	区間（始発地-終着地）	通学費(1 カ月定期)	利用する中学校区
熊野市バスB 飛鳥・五郷線	桃崎(湯の谷)—新町	15,000 円	五郷中学(休校)校区 飛鳥中学校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 37 分・所要時間 47 分 〈下校時〉乗車時間 37 分・所要時間 47 分

登校 桃崎 → 五郷学校前 → 新町 →(徒歩)木本高校
 7:33 7:35 8:10 8:20
下校 木本高校(徒歩) → 新町 → 五郷学校前 → 桃崎
 19:15 19:25 20:00 20:02

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 57 分・所要時間 87 分 〈下校時〉乗車時間 58 分・所要時間 132 分

登校時 桃崎 → 五郷学校前 → JR 熊野市乗換 → JR 阿田和 →(徒歩)紀南高校
 7:33 7:35 8:13→8:23 8:40 9:00
下校時 紀南高校(徒歩) → JR 阿田和 → JR 熊野市乗換 → 五郷学校前 → 桃崎
 17:50 18:10 18:26→19:22 20:00 20:02

路線③	区間（始発地-終着地）	通学費(1カ月定期)	利用する中学校区
熊野市バスC 清流・那智黒石の里線	尾川—新町	19,200円	神上中学(休校)校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 62 分・所要時間 72 分 〈下校時〉乗車時間 62 分・所要時間 72 分

登校時 尾川 → 神上中学校前 → 新町 → (徒歩)木本高校

7:10 7:34 8:12 8:22

下校時 木本高校(徒歩) → 新町 → 神上中学校前 → 尾川

17:15 17:25 18:03 18:27

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 76 分・所要時間 110 分 〈下校時〉乗車時間 78 分・所要時間 136 分

登校時 尾川 → 神上中学校前 → JR熊野市乗換 → JR阿田和駅 → (徒歩)紀南高校

7:10 7:34 8:09→8:23 8:40 9:00

下校時 紀南高校(徒歩) → JR阿田和 → JR熊野市乗換 → 神上中学校前 → 尾川

16:11 16:31 16:50→17:28 18:03 18:27

路線④	区間（始発地-終着地）	通学費(1カ月定期)	利用する中学校区
熊野市バスE 瀬流荘紀南病院線	平谷—紀南高校前	15,000円	入鹿中学校区 尾呂志学園中学校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 62 分・所要時間 64 分 〈下校時〉乗車時間 76 分・所要時間 160 分

登校時 平谷 → 入鹿中学校前乗換 → 木本高校

7:23 7:39→7:41 8:27

下校時 木本高校 → 入鹿中学校前乗換 → 平谷

16:30 17:16→18:40 19:10

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 66 分・所要時間 66 分 〈下校時〉乗車時間 76 分・所要時間 76 分

登校時 平谷 → 瀬流荘 → 入鹿中学校前 → 紀南高校前

7:23 7:47 7:55 8:29

下校時 紀南高校前 → 入鹿中学校前 → 瀬流荘 → 平谷

18:06 18:40 18:48 19:12

路線⑤	区間（始発地-終着地）	通学費(1カ月定期)	利用する中学校区
三重交通バス 熊野—新宮線	大又大久保 —御浜町阿田和	19,040円	飛鳥中学校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 27 分・所要時間 37 分 〈下校時〉乗車時間 27 分・所要時間 37 分

登校時 大又大久保 → 小阪 → 新町 → (徒歩)木本高校

7:53 8:02 8:20 8:30 *小阪は飛鳥中学最寄バス停

下校時 木本高校(徒歩) → 新町 → 小阪 → 大又大久保

17:10 17:20 17:38 17:47

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 52 分・所要時間 60 分 〈下校時〉乗車時間 65 分・所要時間 73 分

登校時 大又大久保 → 小阪 → 御浜町阿田和 → (徒歩)紀南高校

7:53 8:02 8:45 8:53

下校時 紀南高校(徒歩) → 御浜町阿田和 → 小阪 → 大又大久保

16:42 16:55 17:38 17:47

路線⑥	区間（始発地-終着地）	通学費(1カ月定期)	利用する中学校区
紀宝町バス 相野谷線	上桐原—新宮駅前	定期券なし 運賃 100 円	相野谷中校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 75 分・所要時間 117 分 〈下校時〉乗車時間 70 分・所要時間 132 分

登校時	上桐原 → 大里 → JR 新宮乗換 → JR 熊野市 → (徒歩) 木本高校	
	6:40 6:51 7:15→7:42 8:22 8:37	*大里は相野谷 中最寄バス停
下校時	木本高校(徒歩) → JR 熊野市 → JR 新宮乗換 → 大里 → 上桐原	
	16:18 16:33 17:00→17:55 18:19 18:30	

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 19 分・所要時間 26 分 〈下校時〉乗車時間 19 分・所要時間 29 分

登校時	上桐原 → 清水橋乗換 → 紀南高校前
	8:05 8:14→8:21 8:31
下校時	紀南高校前 → 清水橋乗換 → 上桐原
	16:26 16:36→16:46 16:55

路線⑦	区間（始発地-終着地）	通学費(1カ月定期)	利用する中学校区
紀宝町バス 浅里・鵜殿線	上桐原—鵜殿駅前	定期券なし 運賃 100 円	矢淵中校区 旧浅里分校区

木本高校：〈登校時〉乗車時間 70 分・所要時間 117 分 〈下校時〉乗車時間 37 分・所要時間 107 分

登校時	浅里神社 → 鮎田乗換 → JR 新宮乗換 → JR 熊野市 → (徒歩) 木本高校
	6:40 7:00→7:05 7:15→7:42 8:22 8:37
下校時	木本高校(徒歩) → JR 熊野市 → JR 新宮乗換 → 鮎田
	16:18 16:33 17:00→17:55 18:05

紀南高校：〈登校時〉乗車時間 52 分・所要時間 104 分 〈下校時〉乗車時間 21 分・所要時間 96 分

登校時	浅里神社 → 鮎田乗り換え → JR 新宮乗換 → JR 阿田和 → (徒歩) 紀南高校
	6:40 7:00→7:05 7:15→7:42 8:04 8:24
	→ (三交バス) → 御浜町阿田和 → (徒歩) 紀南高校
	7:30 7:57 8:05
下校時	紀南高校(徒歩) → JR 阿田和 → JR 新宮乗換 → 鮎田
	16:29 16:49 17:00→17:55 18:05
	御浜町阿田和 (三交バス) →
	16:53 17:20→17:55

<参考>

JR 時刻表

亀山行	登校		新宮行		下校	
新宮	6:03	7:42	熊野市発	16:33	18:28	19:28
鵜殿	6:08	7:52	阿田和	16:49	18:44	19:44
阿田和	6:17	8:04	鵜殿	16:59	18:55	20:00
熊野市発	6:46	8:24	新宮着	17:00	19:00	20:05

熊野市駅(木本高校)まで
の1か月定期券・運賃

(円)

駅	定期	運賃
尾鷲	8270	590
二木島	5130	240
新鹿	3600	200
阿田和	5130	240
鵜殿	7020	330
新宮	7400	420

阿田和駅(紀南高校)まで
の1か月定期券・運賃

(円)

駅	定期	運賃
尾鷲	10030	860
二木島	7400	420
新鹿	6910	330
熊野市	5130	240
鵜殿	4230	200
新宮	5250	240

参考資料1

東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

令和3年5月1日 教育政策課調べ

	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中2	R 6.3 現中1	R 7.3 現小6	R 8.3 現小5	R 9.3 現小4	R 10.3 現小3	R 11.3 現小2	R 12.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	128	122	118	130	127	119	114	99	123	89	85	69
	前年度対比		-6	-4	12	-3	-1	-5	-15	24	-34	-4	-16
	R3.3対比					-3	-10	-16	-31	-7	-41	-45	-61
北牟婁郡	卒業生数	153	115	110	112	121	93	78	93	80	73	85	74
	前年度対比		-38	-5	2	9	-5	-15	15	-13	-7	12	-11
	R3.3対比					9	-14	-34	-19	-32	-39	-27	-38
小計	卒業生数	281	237	228	242	248	212	192	192	203	162	170	143
	前年度対比		-44	-9	14	6	-30	-20	0	11	-41	8	-27
	R3.3対比					6	-24	-50	-50	-39	-80	-72	-99
熊野市	卒業生数	145	132	113	117	120	111	97	101	105	106	123	98
	前年度対比		-13	-19	4	3	-18	-14	4	4	1	17	-25
	R3.3対比					3	-15	-20	-16	-12	-11	6	-19
南牟婁郡	卒業生数	186	172	143	157	150	153	134	138	128	134	135	106
	前年度対比		-14	-29	14	-7	10	-19	4	-10	6	1	-29
	R3.3対比					-7	3	-23	-19	-29	-23	-22	-51
小計	卒業生数	331	304	256	274	270	264	231	239	233	240	258	204
	前年度対比		-27	-48	18	-4	-8	-33	8	-6	7	18	-54
	R3.3対比					-4	-12	-43	-35	-41	-34	-16	-70
東紀州合計	卒業生数	612	541	484	516	518	476	423	431	436	402	428	347
	前年度対比		-71	-57	32	2	-38	-4	8	5	-34	26	-81
	R3.3対比					2	-36	-93	-85	-80	-114	-88	-169

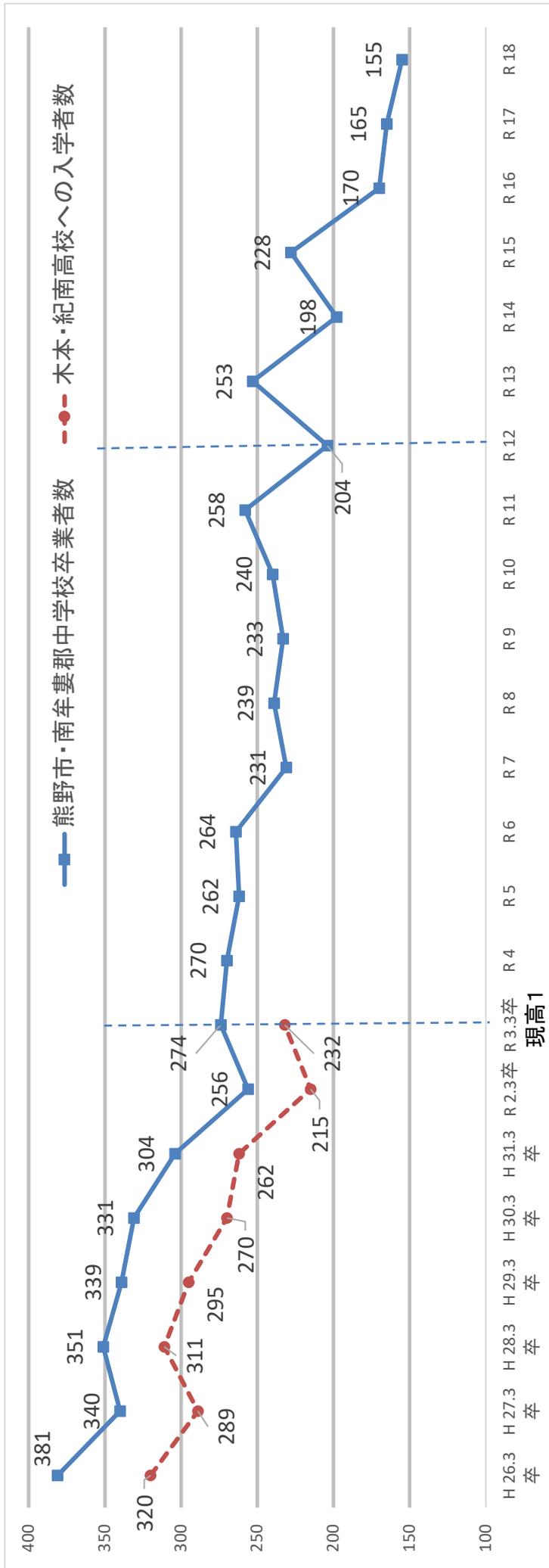
《参考》

木本高校	募集定員	200	160	160	160
	欠員	10	0	2	0
紀南高校	募集定員	120	80	80	80
	欠員	40	18	23	8
学級数	木本・紀南	5・3	4・2	4・2	4・2

紀南地域の 入学定員の推移予測		R 4年度	R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度
	6学級	6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	4学級程度

熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

※R13年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H26年度出生	H27年度出生	H28年度出生	H29年度出生	H30年度出生	R元年度出生	R2年度出生
現小1	98	99	73	108	60	1~2才	0~1才
熊野市	47	52	42	45	39	2~3才	82
御浜町	67	102	83	75	71	3~4才	20
紀宝町	212	253	198	228	170	4~5才	53
合計						5~6才	155

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となることが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となるとした場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。

今後の県立高校活性化の基本となる考え方について

次期「県立高等学校活性化計画」の基本的な考え方

(1) 新しい時代を生き抜いていく力の育成

- ア) 人生 100 年時代の中で、自立した学習者として学び続けることのできる力の育成
- イ) さまざまな変化に主体的に向きあいながら、新たなことを学び、挑戦する意欲の育成
- ウ) 自らの生き方や働き方について考えを深め、学ぶことと自己の将来とのつながりを見出していくことのできる力の育成
- エ) 多様な選択肢の中から進路を決定する能力や人間関係を築く力の育成
- オ) 諸課題の解決に向けて自分の意見や考えを伝えあい、他者と協働してより良い社会を形成しようとする力の育成

(2) 新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進

- ア) 全ての生徒における主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善
- イ) 生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学び
- ウ) 文系・理系を問わず、教科横断的な視点で物事をとらえ、実社会での課題解決に向けて創造的思考力や論理的思考を育む学び
- エ) 地域の方々や職業人など多様な人々と関わりながら、地域の特色や産業を題材に地域の魅力や課題を知り、自分たちに何ができるのかを主体的に考えて行動する課題解決型の学び
- オ) 異なる文化に対する理解や郷土への愛着、語学力やコミュニケーション能力などを高め、将来、世界にあっても地域にあっても活躍できる力の育成に向けた学び
- カ) ICT をはじめとした先端技術を手段として積極的に活用しながら実社会の課題等の解決をめざし、人間ならではの考え方で新たな価値を創造できる力の育成に向けた学び

(3) 多様な生徒が学べる環境の整備

義務教育段階の学び直しが必要な生徒、日本語指導が必要な生徒、特別な支援を必要とする生徒、不登校の状況にある生徒、経済的困難な状況にある生徒等の個別の学習ニーズに応え、将来のキャリアや職業等に希望を持ち、安心して学びを続けることのできる環境の整備

(4) 少子化の中での学校や学びの特色化・魅力化の推進

- ア) 生徒の多様な進路志望に対応するとともに、これからの時代に求められる力を備えた人材を育成できる普通科、専門学科、総合学科、定時制、通信制における学び
- イ) 小規模高校の総括的な検証をふまえ、全ての県立高校に通う生徒に部活動も含めた教育活動の中で社会性・人間性を育むとともに、生徒の学習ニーズに対応した幅広い科目の開設や専門性が維持できる学校の規模やあり方
- ウ) 生徒の学びのニーズを基本としながら、通学環境、地域における高校の役割をふまえた学校の配置

(5) 特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上

- ア) 多様な主体との連携・協働など、学校内外の教育資源を最大限に活用した教育の推進
- イ) 校長のリーダーシップのもと、学校内外の人材との連携と分担を通して様々な課題に対応できる学校マネジメントの推進
- ウ) 各学校において育成をめざす資質・能力等に係る教育活動の指針の明確化とカリキュラム・マネジメントを通じた教育活動の改善
- エ) 生徒の可能性を引き出すための個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた教職員の資質の向上
- オ) 中学生や保護者、中学校教員をはじめ広く県民の皆さんに向けた各学校における特色・魅力ある教育の情報発信

協議のまとめ

紀南高校は、平成19年に高校では三重県初、全国でも2番目（3校目）にコミュニティ・スクールに指定され、紀南地域の方々の支援を得ながら、年間を通じたインターンシップを教育課程に導入するとともに、特色ある授業として「東紀州学」や「地域産業とみかん」を実施するなど地域と連携した取組を進めてきました。また、福祉関連の教育課程も設置し介護士へと進む人材の育成を行うとともに、看護学校等への進学を目指す生徒への学習指導に力を入れるなど、地域医療や福祉に貢献できる人材の育成にも一定数の成果を出してきました。さらに、地域の様々な職業の方と将来について語り合う対話集会を実施し、キャリア教育の推進を図るとともに、地域で生徒が貢献するボランティア活動や小中学校との連携を通じて、地域における高校生の活躍の場を広げてきました。これらの取組については、御浜町・紀宝町全戸に配付される広報誌とともに、コミュニティ通信「紀南の風」として年2～3回配付するとともに、地域の新聞社やケーブルテレビにも常に学校の話題を提供し、ニュースに取り上げてもらうなどして地域に積極的に情報発信しています。

そうした成果として、地域の方々からも紀南高校はよく頑張っているといった評価の声を聞くことも多く、特色ある取組に参加したいと希望して紀南高校を選択する中学生も一定数いることから、ある程度の入学者数を確保してきましたが、少子化が進行する中で、定員を超えるまでの入学者の増加にはつながっていない状況です。熊野市・南牟婁郡の中学生は、地元を離れる一定数を除けば、多くは古くからの伝統を持つ木本高校を目指す傾向があると考えられます。

紀南高校は現在1学年2学級規模の学校となり3年目を迎えました。この間、教員定数が10名ほど減り、授業、校務分掌、部活動等の業務に困難が生じています。生徒の進路のニーズに応じた教育課程の実施に向け、単位制高校として多様な選択科目を設定していましたが、担当する教員が限られる状況もあり科目数を削減するなど対応をしています。「地域産業とみかん」のように特色ある設定科目では、体験活動の良さがうまく伝えられなかったこと、他にも多数ある選択科目が自分の進路に結び付けた選択には至らなかったこと、全体の生徒数も減少したことなどが影響し、選択生徒が激減するなど今後の開講が危ぶまれる状態となっています。部活動についても団体チームが組めない状況が生じ、削減などしています。今後少子化がさらに進む中で、入学者定員の減があれば現在の教育内容の維持が難しく、大幅な教育課程の改編や取組の削減を行わざるをえなくなり、特色ある教育活動の縮小は必至となります。

紀南地域の将来の生徒数については、最近の出生数を考えても厳しい状況といえます。高校だけでなく地域の子どもの学びをどうするのか、地域・市町はどう支援するのかを考えることが重要です。その上で、紀南地域全体の学校規模と配置について、今後のあり方を協議・検討する必要があると考えます。